

「そりゃそうだ（それはそうだ）」の意味機能

—「 ϕ そうだ」と比較して—

八木 真生

キーワード 明示的主題、主題を伴わない、捉え直し、一般化可能なことから、具体的ことがら

1. はじめに

「そりゃそうだ（それはそうだ）」は、指示詞「それ」、提題助詞「は」、そして、肯定の意味を表わす「そうだ」から成る。先行文脈で述べられたり、起こったりしたことがらを、話し手が自ら納得する（＝(1)、(3)）、あるいは聞き手に納得させる（＝(2)）文脈でよく用いられる。

さて、「そりゃそうだ」の例の中には、(3)のように主題を伴わない「そうだ」(以下、主題がないことを「 ϕ 」で表し、主題を伴わない「そうだ」を「 ϕ そうだ」で表す)で言い換えられるものもあるが、(1)、(2)のように言い換えられないものもある。

- (1) (SN1が静岡で止まらない新幹線ひかりに乗ってしまい、新横浜まで行った話)

SN1：ほいで下りのに乗ったらさ、車掌回ってきやがってさ、別に俺キセルしてるわけじゃないんだからいいんだけどさ。こうこうこうだから、乗り越しちゃったって。今度から気をつけてくださいねって。何か俺が怒られちゃってさ、怒られたっていうか、気をつけて、そりゃ／それは／* ϕ そうだ。 [名大]

- (2) (みんなで紅葉狩りに行くために出す車についての話。MT1は近々車を買う予定。「スパシオ」は、MT1が買いたいと思っている車の名前。)

MT1：え、でも、今度の金曜日スパシオ間に合わない。＜笑い＞

YA1：そりゃ／それは／* ϕ そうでしょう。 [名大]

- (3) (AはBの兄弟の志望校を尋ねている。)

A：一応でも、県立目指すんでしょう？

B：そう、うん。みたい。

A：うん。うん。そりゃあ／それは／ ϕ そうよね。あんた達二人で、

お金大変だもんね。

[電話]

さらに、これらの例を見ると、「そりゃそうだ」が、「それは当然だ」と解釈できることがわかる。

そこで本研究では、明示的テーマ及び「 ϕ 」の意味機能に注目し、「そりゃそうだ」(あるいは「それはそうだ」)の意味機能を「 ϕ そうだ」との比較を通して明らかにすることを目的とする。そして、なぜ「当然」の意味を持つかも合わせて説明する。

尚、「そりゃそうだ」の用例はすべて、「そりゃ」を「それは」で言い換えることが可能である。「そりゃそうだ」も「それはそうだ」も同じ意味機能を持つものとして扱う。

2. 明示的テーマに関する先行研究と、本研究の意義

明示的テーマ及び主題の省略の意味機能を談話の構造という観点から論じたものに、畠 (1985)、砂川 (1990)、甲斐 (1995) などがある。¹⁾ 畠 (1985) と砂川 (1990) は書き言葉を対象としている。また、甲斐 (1995) は、話し言葉も対象としているが、比較的、談話のトピックの転換が分かりやすく、構成の整ったものだけを扱っている。話し言葉において特徴的に用いられる(1)、(2)、(3)のような例は全く研究されていない。

これらの研究に共通する砂川 (1990) の主張を以下に示す。

- (4) あるひとまとまりの談話は、さらに小さな単位の談話からなる。

主題の省略された文は、その文を前の談話に結び付け、明示的テーマを伴う文は、その談話とそれ以前の談話との間に境界を設ける機能を持つ。

境界を生じさせる原因として、「書き手の視点の変化」が挙げられている。以下にその例を示す。

- (5) 「このおいとも今夜で当分、お別れだ」と僕は心ひそかにツブやいた。
僕はきょう、これから、このお寺、永平寺でくらすことになる。

(砂川1990: 30)

(5)では、第一文と第二文のテンス形式が異なっている。第一文では、書き手は「僕」の過去の行動を、物語の報告時に視点を置いて語っており、第二文では、報告時を離れ、過去の時点にさかのぼってその時点の「僕」の意識内容を語っている。この視点の変化が、第二文において再び主題を提示する必要を生じさせた、と砂川 (1990) では説明している。²⁾

本研究でも、明示的テーマを伴う文が持つこの、「その談話とそれ以前の談話と

の間に境界を設ける機能」を援用し、「そりゃそうだ」の意味機能を明らかにしていくが、ここで、本研究で話し言葉を対象とする意義を説明しておきたい。

先行研究で対象としているのは、はっきりとした書き手の視点や事態の描き方がある書き言葉である。そこにおいては、主題の明示化が、書き手の視点の変化を表すために用いられることがある。

一方、本研究が対象とする話し言葉、中でも特に雑談においては、話し手と聞き手が常に交代し、ゴールもないため、安定した一定の視点というものがない。話し言葉を観察することによって、今まで分析されてこなかった、話し言葉に特徴的な主題の明示化の用法が明らかになると考えられる。

さて次節3節ではまず、先行文脈と「そりゃそうだ」の間に境界が認められることを示す。その上で4節において、その境界が、具体的なことがらを一般化して捉え直すという、ことがらの捉え方の変化によって生じるものであることを説明していく。

3. 仮説の提示

3.1 先行文脈と「そりゃそうだ」の間の境界

以下に、冒頭の例を再掲する。ここでは、「 ϕ そうだ」は許容されない。

- (6) 今度から気をつけてくださいねって。何か俺が怒られちゃってさ、怒られたっていうか、気をつけて、{そりゃ/* ϕ } そうだ。 (=1)

一方、次の(7)は、(6)の「そりゃそうだ」の部分をも、文意があまり変わらないように書き換えたものである。

- (7) ((6)と同じ文脈で)

怒られたっていうか、気をつけて、まあ、考えてみたら、 ϕ そうだ。

「まあ、考えてみたら」を用いて、過去のある一時点において起こったことがらである指示対象を、現時点から振り返って捉えることを表す場合は、「 ϕ 」が許容される。

次に、先行文脈と、「そりゃそうだ」それぞれのテンスに注目したい。

先行文脈では、「乗り越して、反対方向の電車で戻ってきたら、怒られた」たという、SN1が過去のある時点において経験したことがらを述べている。一方、「そりゃそうだ」をパラフレーズすると、「乗り越して、反対方向の電車に乗り換えて戻ってきたら、怒られる」るとなる。両者の文末に注目すると、「怒られる」と「怒られた」のように、テンスが異なっていることが分かる。

同様の例を(8)に示す。(8)は、「そりゃそうだ」の例ではないが、「そりゃ疲れ

るわ」を「そりゃそうだわ」で言い換えることが可能である。

(8) (WA 1がマイクロフィルムでしか残っていない文献を読んだ。)

WA 1: (前略) 何か、フィルムみたいに乘せて、機械で、こう見るんだけど。でもね、ひたすらこう、濁点と半濁点を見て、もうね、気づいたら5時間たってて。

SE 2: えーっ、疲れたね。

WA 1: 疲れた。

SE 2: |そりゃ/*φ| 疲れるわ。 [名大]

先行文脈では「疲れた」と過去のことがらを述べているのに対し、「そりゃ疲れるわ」と、非過去を用いている。

以上のことから、先行文脈と「そりゃそうだ」の間には何らかの境界があることがわかる。

3. 2 ことがらの捉え方の変化

(6)の「そりゃそうだ」は、「乗り越して、反対方向の電車に乗り換えて戻ってきたら、怒られる」とパラフレーズが可能であった。つまり、「そりゃそうだ」は、過去のある一時点に話し手SN 1が経験した、具体的な一時空間におけることがらを、誰がいつしてもそうなる、という一般化したことがらとして捉えていると考えられる。

また、(8)の「そりゃ疲れるわ」は、パラフレーズすると、「細かいものを長時間見ていたら、疲れるわ」となる。やはりここでも、相手WA 1が経験した、具体的一時空間におけることがらを、一般化したことがらとして捉えていると考えられる。

3. 3 「一般化」の定義と仮説の提示

ここで、本研究で用いる「一般化」、「一般化可能」という語を、次のように定義する。

(9) 先行文脈のことがらを、具体的なある一時空間においてではなく、より一般化した時空間において捉えることを、「一般化して捉える」と呼ぶことにする。

また、先行文脈のことがらが真であることが、具体的なある一時空間だけでなく、より一般化した時空間においても成り立つ場合、そのことがらを「一般化可能なことがらである」と呼ぶことにする。

「そりゃそうだ」と「φそうだ」それぞれの意味機能に関して、次の仮説を立てる。

- (10) 「そりゃそうだ」は、先行文脈で述べられたり起こったりしたことがらを一般化して捉え直した上で肯定することを表わす。
「 ϕ そうだ」は、先行文脈で述べられたり起こったりしたことがら自体を肯定することを表わす。

4. 仮説の検証

さて、先行文脈を受けて「そうだ」と肯定する場合には、次の二つの場合がある。先行文脈で述べられたり起こったりしたことがら（以下、単に「先行文脈のことがら」）そのものを肯定する場合と、先行文脈のことがらをより一般化した時空間において捉え直した上で肯定する場合である。4. 1では後者について、4. 2では前者について、詳しく検討し、仮説を検証していく。

4. 1 一般化した上で肯定する場合

ここでは、先行文脈自体を肯定するのではなく、それを一般化して捉え直した上で肯定する場合の例を見る。そして、その場合に「そりゃそうだ」が用いられることを確認する。

4. 1. 1 先行文脈のことがら a が真であることを、a を一般化した A が真であることを根拠に、自分が納得したり、相手を説得したりする場合

先行文脈のことがら a が真であることが納得できない場合に、そのことがら a を一般化して捉え直した A が真であることを根拠に、自分が納得したり、相手を説得したりすることがある。

再度、(1)を見てみたい。

- (1) 別に俺キセルしてるわけじゃないんだからいいんだけどさ。こうこうこうだから、乗り越しちゃったって。今度から気をつけてくださいねって。何か俺が怒られちゃってさ、怒られたっていうか、気をつけて、そりゃ/ ϕ そうだ。

話し手は最初、「別に俺キセルしてるわけじゃないんだからいいんだけどさ」と考えていた。しかし、車掌に注意を受けた後、「いけないことだ」と納得している。

この際、話し手は先行文脈のことがらを、「乗り越して反対方向の電車に戻ってくること」と一般化して捉え、「いけないことだ」と納得していると言える。つまり、当該のことがらを、一般化して捉え直して初めて、納得しているわけ

である。ⁱⁱⁱこの場合、「そりゃそうだ」が用いられる。

先行文脈のことがら：「乗り越して、反対方向の電車で戻ってきたら、怒られた」

→一般化したことがら：「乗り越して、反対方向の電車で戻ってきてはいけない」

一方、「 ϕ そうだ」は、先行文脈のことがら自体を肯定することを表す。ここで「 ϕ そうだ」を用いると、納得していなかったという先行文脈があるにも関わらず、唐突に納得することを表わしてしまうから、許容されない。

ところで、冒頭で、「そりゃそうだ」が「それは当然だ」という解釈を持つことに触れた。それは、「そりゃそうだ」が一般化可能なことがら、即ち、時空間に関わらず成り立つことがらを表わすことから生じる意味であると説明できる。

次も、同様の例である。

(12) A：一応でも、県立目指すんでしょう？

B：そう、うん。みたい。

A：うん。うん。{そりゃあ/ ϕ } そうよね。あんた達二人で、お金大変だもんね。 (=3)

話し手Aは、「Bの兄弟が、県立の学校を志望する」という相手の答えを聞き、「兄弟がいたら、誰でも、学費の安い県立の学校を志望する」と、一般化可能なことがらとして納得している。この際、話し手が既存の一般的知識(=以下、①として示す)と、話し手が見過ごしていた事実(=②)を用いて、先行文脈のことがらを一般化して肯定(=③)している。

先行文脈のことがら：「Bの兄弟が、県立の学校を志望する」

①：県立の学校は学費が安い

②：Bは二人兄弟で、家計が大変だ

→③：兄弟がいたら、学費の安い県立の学校を志望する

(12)では、「 ϕ そうよね」での言い換えが可能である。終助詞「よね」があるため、今、聞いたことを確認するという解釈が成り立つからである。

一方、「よね」を用いない以下の場合、「 ϕ そうだ」は許容されない。

(13) (12と同じ文脈で)

A：うん。うん。{そりゃ/ ϕ } そうだ。あんた達二人で、お金大変だもんね。

「県立目指すんでしょう？」と相手に質問しておきながら、相手の答えを「 ϕ そうだ」と肯定するのは、発話として不適切なため、許容されないのである。

4. 1. 2 先行文脈のことがら a しか見えていない相手に、それがより一般的なことがら A の、具体的な一場合である（＝一般化可能である）ことを提示する場合

次に、先行文脈のことがら a しか見えていない相手に、それを一般化したことがら A が真であることを提示することによって、A の具体的な一場合である a が真であることを納得させることがある。

(14) MT 1 : え、でも、今度の金曜日スパシオ間に合わない。

YA 1 : そりゃ ϕ / それは そうでしょう。 (=2)

相手の MT 1 は、今、気づいたかのように、「今度の金曜日スパシオ間に合わない」と言っている。その相手に対し、話し手の YA 1 は、そのことがらが一般化可能であることを提示することによって、それが今気づくようなこと、今さら相手にわざわざ言うようなことではなく、当然であることを納得させようとしている。

「そりゃそうでしょう」の後に、根拠を補足するとしたら、「だってまだ注文してもいないんだから」となるだろう。聞き手が既有一般的知識（＝①）と、聞き手が見過ごしている事実（＝②）を根拠に、先行文脈を一般化可能なことがら（＝③）として提示している。

先行文脈のことがら：「今度の金曜日までにスパシオが間に合わない」

①：「車を注文してから納車されるまでには時間がかかる」

②：「まだ車を注文していない」

→③：「今から注文しても、数日以内には納車されない」

次も、同様の例である。

(15) OK 1 : やっぱ、TOちゃん、ちょっと、ちょっとおばさんになったね。

OA 2 : そりゃ ϕ / ϕ そうでしょう。 [名大]

OA 2 は、先行文脈のことがら「TOちゃんが少しおばさんになった」が、TOちゃんに限ったことではなく、一般化可能なことがらであることを OK 1 に示している。

先行文脈のことがら：「TOちゃんが少しおばさんになった」

①：人は年をとる

②：X年という時間が経過した

→③：誰でも時間が経てば、年をとる

(15)においても、「 ϕ そうだ」での言い換えは許容されない。^{iv}

以上、4. 1では、先行文脈のことがらを、一般化した上で肯定する場合について検討し、その場合に「そりゃそうだ」が用いられ、「 ϕ そうだ」が用いられないことを示した。

4. 2 一般化しないで肯定する場合

4. 2では、先行文脈のことがらを、一般化しないで、ことがら自体を肯定する場合とはどのような場合であるか、検討していく。

4. 2. 1 文脈が、ことがら自体の正否を問題にするようなものの場合

文脈が、ことがら自体の正否を問題にするようなものである場合は、ことがら自体を肯定する。

- (16) (サスペンスドラマの一場面。犯人の前で自分の推理を述べている。)
 …そしてアパートに戻り、彼女を殺した。{ ϕ /*そりゃ} そうですね？

ここでは、「○月○日に△△がアパートに戻り、彼女を殺した」という、過去のある一時点におけることがらの正否を問題にしている。時空間を越えて一般化したことがらの正否を問題にしているのではない。

次も同様の例である。

- (17) (AM1が自分の父親についての話をしようとしているところで)
 AM2: あ、パチンコ屋に行っちゃうお父さんだったよね。
 AM1: { ϕ /*そりゃ} そうだよ。 [名大]

AM2は、「AM1の父とは、パチンコ屋に行ってしまうお父さんのことである」ということがらの正否を問題にしている。

(16)、(17)いずれも、「 ϕ そうだ」が用いられ、「そりゃ そうだ」での言い換えはできない。

4. 2. 2 ことがらが、一般的規則に従わないものだと見なす場合

先行文脈のことがらの性質が、一般的規則に従わないものであると話し手が見なす場合、ことがら自体を肯定する。

- (18) A: 映画、二本も見てきたの？
 B: { ϕ /*そりゃ} そうだよ。何となく見たくなくなってね。

Bは、「自分(=B)が映画を二本見た」ということがらは、「何となく見なくなった」ことによって起こったと捉えている。つまり、一般的規則に従わないことがらであると捉えている。この場合、「 ϕ そうだ」が選択され、「そりゃ そうだ」は許容されない。

一方、一般的規則に従ったものであると見なした場合は、以下のように「そりゃ そうだ」が許容される。

- (19) ((18)と同じ文脈で)
 B: { ϕ /そりゃ} そうだよ。せっかくシネコン行ったんだから。^{vi}

ここでは、「自分（＝B）が映画を二本見た」ということがらを、「シネコンに行ったら、映画を何本か見る」と一般化可能であると見なしている。

次の⑳も、㉑と同様の例である。

㉑（旅行の計画の確認をしている。）

A：じゃ、20日の午前は、清水寺を見てから、知恩院に行くんだね？

B：「 ϕ ／*そりゃ」 そうだよ。まあ、どっちでもいいんだけどね。

「20日の午前は、清水寺を見てから、知恩院に行く」ということがらは、「まあ、どっちでもいいんだけどね」と言っていることから分かるように、話し手のBが何らかの一般的規則に従って決めたことではない。この場合、「 ϕ そうだ」が選択され、「そりゃそうだ」は許容されない。

一方、㉒では、「そりゃそうだ」が許容される。

㉒（㉑と同じ文脈で）

B：「 ϕ ／そりゃ」 そうだよ。清水寺に早い時間に行かないと、混んじゃうから。

話し手は、先行文脈のことがらを、「人気のある場所に先に行ってから、そうでないところに行く」と一般化可能であると見なしているのである。

以上、4節では、まず、先行文脈を受けて肯定する際には、ことがら自体を肯定する場合と、ことがらを一般化した上で肯定する場合の2つがあることを示した。その上で、前者においては「 ϕ そうだ」が用いられ、「そりゃそうだ」が許容されないこと、後者においては反対に、「そりゃそうだ」が用いられ、「 ϕ そうだ」が許容されないことを示すことにより、⑩に示した仮説を検証した。

5. 一般化

5節ではさらに、一般化のタイプにはどのようなものがあるか、また、「そりゃそうだ」の文を聞き手がどのように解釈するか、論じる。

5.1 一般化の下位タイプ

これまでに見た「そりゃそうだ」の例の、先行文脈のことがらはすべて、ある具体的時空間において成立することがらであった。次の例では、先行文脈が、既に一般化したことがらのように見える。しかし、ここでも、「そりゃそうだ」を用いることができる。

㉓（ある具体的エピソードを受けて）

A：口は災いのもとだね。

B：|そりゃ／φ| そうだよ。

[実例]

この場合の一般化は、次のように説明できる。先行文脈のことがら「Aが『口は災いのもとだ』と見なした」を、「誰でも『口は災いのもとだ』と見なす」と一般化して肯定しているのである。

このように、一般化の下位タイプとして、「ある人がある時空間においてXと見なす」を、「誰でもどんな時空間においてもXと見なす」と一般化するタイプがある。

次も、このタイプの例である。

(23) A：論文書くのって難しいなあ。

B：|そりゃ／φ| そうだよ。

「論文を書くのが難しい」ということが、Aのみがそう思うようなことではなく、誰もがそう思うようなことである、と一般化している。

5. 2 一般化の解釈の可能性

「そりゃそうだ」は、先行文脈のことがらを一般化可能なことがらとして示すが、どのように一般化しているかは、聞き手が、持っている情報や与えられた情報から最も適当な解釈を選択することになる。

次の例では、一般化可能であると判断する根拠が与えられずに、「そりゃそうだ」が用いられている。

(24) A：へえ、毎日ちゃんと大学通ってるんだ。

B：|そりゃそうだよ。

例えば、聞き手Aが、「Bは学生だ」がその根拠だと判断すれば、「そりゃそうだ」を、「学生だったら、誰でも毎日学校へ通う」と解釈することになる。

しかし、以下のように話し手の意図と違う解釈をしてしまうこともありうる。

(25) A：へえ、毎日ちゃんと大学通ってるんだ。

B：|そりゃそうだよ。

A：ふうん、まじめだなあ。

B：違うよ。単位が危ないから、仕方なくだよ。

話し手Bは、「単位が危なかったら、誰でも毎日学校へ通う」と述べたかったのだが、聞き手のAは、それとは違う解釈をしてしまったのである。

また、話し手が一般化の根拠とする情報が、聞き手が持ちえないような種類の情報である場合、話し手がそれを与えない限り、聞き手は「そりゃそうだ」の意味を解釈することができない。

- (26) 母：ずいぶん熱心に勉強しているわね。
子：そりゃそうだよ。
母：えっ、どうしちゃったの、急に？
子：あれ？明日、試験だって言ってなかった？
母：聞いてないわよ！

話し手である子どもは、「試験前日だったら、誰だって熱心に勉強する」と述べたかったのだが、聞き手である母は「明日は試験だ」という情報を持っていなかったために、「そりゃそうだ」が解釈できなかったのである。

6. まとめ

本研究では、「そりゃそうだ」の意味機能を「 ϕ そうだ」との比較を通して明らかにした。「そりゃそうだ」が、先行文脈のことがらを一般化して捉え直した上で肯定する、つまり一般化可能なことがらとして示すのに対し、「 ϕ そうだ」は、先行文脈の具体的ことがら自体を肯定することを論証した。そして、「そりゃそうだ」が表す「当然」の意味は、一般化しても成り立つという意味から生じるものであると説明した。

尚、日本語教育の現場で「そりゃそうだ」を教える際には、次のことに留意すべきであろう。「そりゃそうだ」を、相手を説得する文脈で用いる際、特に、指示対象が相手の発話内容である場合は、相手の発話を「今さら気づくようなことではなく、一般化可能な当然のこと」と捉えていることを表すので、相手の体面を傷つけることになりかねない。^{vi}相手を説得する文脈では、相手との関係をよく考慮した上で使用しなければならない。

注

- i これらの先行研究では、「主題の省略」という語が用いられている。いずれも、主題が構文上必須要素である例を分析対象にしている。一方、本研究では、主題が「そうだ」の必須要素だとは見なせないので、「主題を伴わない『そうだ』」という言い方を用いる。
- ii 砂川（1990）では、書き手の視点という問題に関わるものとして、他の登場人物の介在、脈絡の不整合、時空間的なギャップ、語り様式の変化を挙げている。

- iii 一般化した上で肯定する際に、「キセルをするのはよくない」という話し手が既に持っていた一般的知識や、「乗り越して戻ってくるのも、キセルをするのも同じことだ」というそれまで見過ごしていた事実を動員する場合もあると考えられる。
- iv 下降イントネーションを伴う場合は、「 ϕ そうでしょう」は許容されない。しかし、上昇イントネーションを伴う場合は、話し手が既に述べたことから自体への同意を確認している意味になり、「 ϕ そうでしょう」も許容される。
- v (16)の文脈で、「 ϕ そうですね。」と言うことも可能であり、それを「それはそうですね。」で置き換えることも可能である。しかし、この場合の「それはそうだ」は、「そのことに関しては」と主題を限定し、述部で「そうだ」と肯定することを表しており、本稿で論じている「一般化可能なことからして示す」意味機能は有していない。
- vi シネコンとは、シネマコンプレックスの略で、館内に複数のスクリーンを持つ、複合映画館のことである。
- vii 用例(2)、(15)がこの場合に当たる。

参考文献

- 甲斐ますみ (1995) 「省略のメカニズム—談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心に—」『岡山留学生センター紀要』第3号 1-18
- 砂川有里子 (1990) 「主題の省略と非省略」『文芸言語研究 言語篇』18 15-34
- 島弘巳 (1985) 「主題の展開と談話分析」『国際商科大学論叢 商学部編』第31号 103-117

例文出典

[名大] : 平成13年度～平成15年度、科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(研究代表:大曾美恵子)の一環として収集された「名大会話コーパス」。雑談を文字化したもので、会話参加者の年齢、性別、方言はさまざまである。

[電話] : Linguistic Data Consortium が研究目的で96～97年に収集したデータ。

電話会話を文字化したもので、会話参加者の年齢、性別、方言はさまざまである。

[実例]：筆者が普段、生活の中で収集した例。
その他、表示のないものはすべて作例である。

